

女性の解放は農村女性から

松本侑壬子・ジャーナリスト

丸岡秀子（1903～1990）は、戦前戦後を通じて一貫して女性の地位向上を軸に平和、社会、母親、消費者、教育問題などに関して発言し、行動をした、女性史上の巨大な存在である。理論的指導者という言葉からくる“頭がよくて近寄り難い”イメージとは程遠く、小柄で温和な笑顔で、有名無名、年齢、職業肩書きなど一切関係なく、心を割って相手に向かう人であった。

「重要なことをやさしく、わかりやすく心を込めて語れる人こそ本物の人」— これは生前の、と言っても晩年のころからではあるが、初めてジャーナリストとして取材させてもらって以来、すっかりファンの一員となった私自身が、常に丸岡さんに抱いていた実感である。

このほど、丸岡秀子の生涯が記録映画（根本銀二監督）となって、多くの人々に紹介されることになり、個人的にも本当にうれしい。彼女の生涯にわたる精力的な発言の根本には、農村女性問題があった。というより、丸岡秀子のすべての発言も業績もここから出発している。この映画には、なぜそうであったのか、なぜ「農村女性の解放なくして、女性の解放なし」（丸岡）なのか、が具体的にわかるように映像化されている。

丸岡秀子は、長野県南佐久にある造り酒屋の長女として生まれた。秀子がまだ10カ月のときに母・絹は24歳で病死。大家族の嫁として「働き疲れて」死んだのだ。秀子は母方の祖父母を助け、土を耕す生活から生涯にわたる生きる原点としての「農」を心身ともに刻み付けることになる。

貧しいながら祖父母の愛情をたっぷり受けて成長しながら、ついに自分を引き取らなかった実

父への複雑な思いは、生涯にわたる父娘の愛憎こもる葛藤となる。が、それはまた、後に親の愛情を求める子どもの気持の側に立つ教育観へとつながっていく。画面に登場するいかにも優等生だどこか寂しげな明治の少女、秀子像が、雄弁にそのことを物語る。やがて、長野女学校に進み、雑誌「白樺」などの大正デモクラシーの思想に触れて、自我に目覚めていく。1925年、奈良高等女子師範学校（現・奈良女子大学）を卒業後教師になり、その傍ら文筆活動を始める。経済学者と結婚、子どもも生まれるが、夫が急逝。奇しくも娘も自分と同じ10カ月、自分も亡母とほぼ同じ25歳だった。寂しい少女から寂しい母親へ— いや、そんな感傷に浸る暇はなかった。

乳飲み子を連れて生活のために東京の産業組合中央会（後の農協）に就職してからは、秀子の本当の意味での社会的自立のスタートである。そこで秀子は全国の農村の深刻な状況を知り、すすんで農村実態調査に乗り出す。幼児を背負ったり、手を引いたりしながら着物に下駄履きで雪の農道を歩く当時の秀子の映像が胸を打つ。車もパソコンもない、文字通り地面をはうような調査行である。日本の女性問題の原点となる「日本農村婦人問題」は、こうした聞き取り実態調査の分析・考察から生まれた。1937年に発表されたその実態は、果たして21世紀の今、私たち日本女性の生活や精神的脅威とはまったく無縁のものであろうか。

世紀を超えた鋭い問いかけと、他者への限りない共感と優しさの共存する丸岡秀子という女性の魅力を改めて懐かしくかみしめている。



記録映画（88分）／根本銀二監督

『丸岡秀子 ひとすじの道』

※上映についての問合せ先 TEL 03-3524-1565 (有)インディーズ

